ちいきのなかま通信
No.87

発行日：2021年3月16日
発行者：特定非営利活動法人　ちいきのなかま

長崎新聞にファミサポ提供会員さんを取材していただきました。

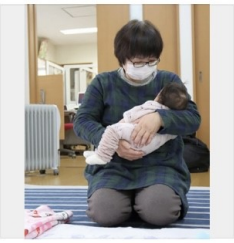
この取材で伝えたかったは、支援を20年間支え続けた人々のことと次世代に繋がる支援の輪のことです。この連なりの価値の重さを感じています。孤立化がすすむ中で、この事は未来への希望です。この事業は20年の歳月、市民がつながり支え合い営まれてきた事業です。花園町のファミサポ事務所は当初から会員さんが気楽に立ち寄り子育てやサポートについて語り合う、安心できる場（空間）でした。行政の委託事業という土台があったからこそ、安定的に運営ができたことは言うまでもありません。

活動が楽しい…多くの提供会員さんはそう言ってくれます。とてもありがたいと日々感謝していますが、今後の社会でこの状態を維持することは難しいことです。既にファミサポでの担い手不足は全国共通の問題です。NPO法人として次年度からの3年間は、変化の期間と位置づけていこうと思います。子育てに寄り添ってきたからこそ取り組む次のステップ…近い将来ご紹介していければと思います。

子育ての『隙間』を埋める　子ども一時預かり、送迎…２０年余 幅広い世代活躍

2/23(火) 12:00 配信 1

長崎新聞社



預かった赤ちゃんを寝かしつける大賀さん＝佐世保市、ファミリーサポートセンター佐世保

長崎県佐世保市がＮＰＯ法人に委託して運営する「ファミリーサポートセンター佐世保」は開設から２０年が過ぎた。現在、県内１２市町が子どもを預かる事業を実施しているが、最初に始めたのが佐世保市。共働き家庭の増加に伴い利用件数が年々増える中、ベテランから現役の子育て世代までセンターの提供会員（スタッフ）らは精力的に活動に取り組んでいる。

１７日午前。花園町のセンターで、提供会員の大賀幸子さん（６４）が預かった生後４カ月の赤ちゃんを寝かしつけていた。「昨晩は寝なくて大変だったとママから聞いたけれど、本当にお利口さん」。安心しきった寝顔に目を細めた。

センターは２０００年に開設。ＮＰＯ法人ちいきのなかま（守永恵理事長）が市の委託を受けて運営している。買い物や求職活動などさまざまな事情で子どもを預けなければならない人に対応。センターや利用者の自宅で預かったり送迎したりする。料金は１時間７００円から。

大賀さんは設立当初から活動する“古株”の１人。自身は自宅で和裁の仕事をしながら、３人の子どもを育てた。活動を始めた最初のうちは、誰かの子どもを預かる責任の重みを感じ、わが子を「置いていく」母親に共感できないこともあった。

だが、たとえ一時でも子育ての緊張から解放され、晴れやかな表情で戻ってくる母親と、うれしそうに出迎える子どもの笑顔を見るとすぐに見方は変わった。「お母さんがより良い１日を送れるように手を尽くすことがやりがい」。今ではそう思う。

◆

働く母親の増加や働き方の変化を背景に、センターの利用件数は数年前から増加傾向にある。本年度は１月までで計１７５２件。２０１８年度の総数を既に上回っている。一方、提供会員の登録者数は２５２人。このうち活動実績がある人は絞られ、「会員の負担は増えている」と守永理事長は明かす。

提供会員の確保は課題だが、中には３０、４０代の現役子育て世代もいる。中学生と小学生の子どもを持つ向坂望さん（４１）は自身も利用者の１人だった。若い親の気持ちに寄り添い、センターに恩返しをしたいと活動に加わった。

他の家庭の育児を支えることに対し「まだ自分が子育て中なのに」と驚かれることもある。ただ、活動を通じてわが子の良い部分を再認識したり、活動する母親たちとのつながりができたりするなど得るものも多い。「自分の子育てにこそ生かせる」と向坂さん。

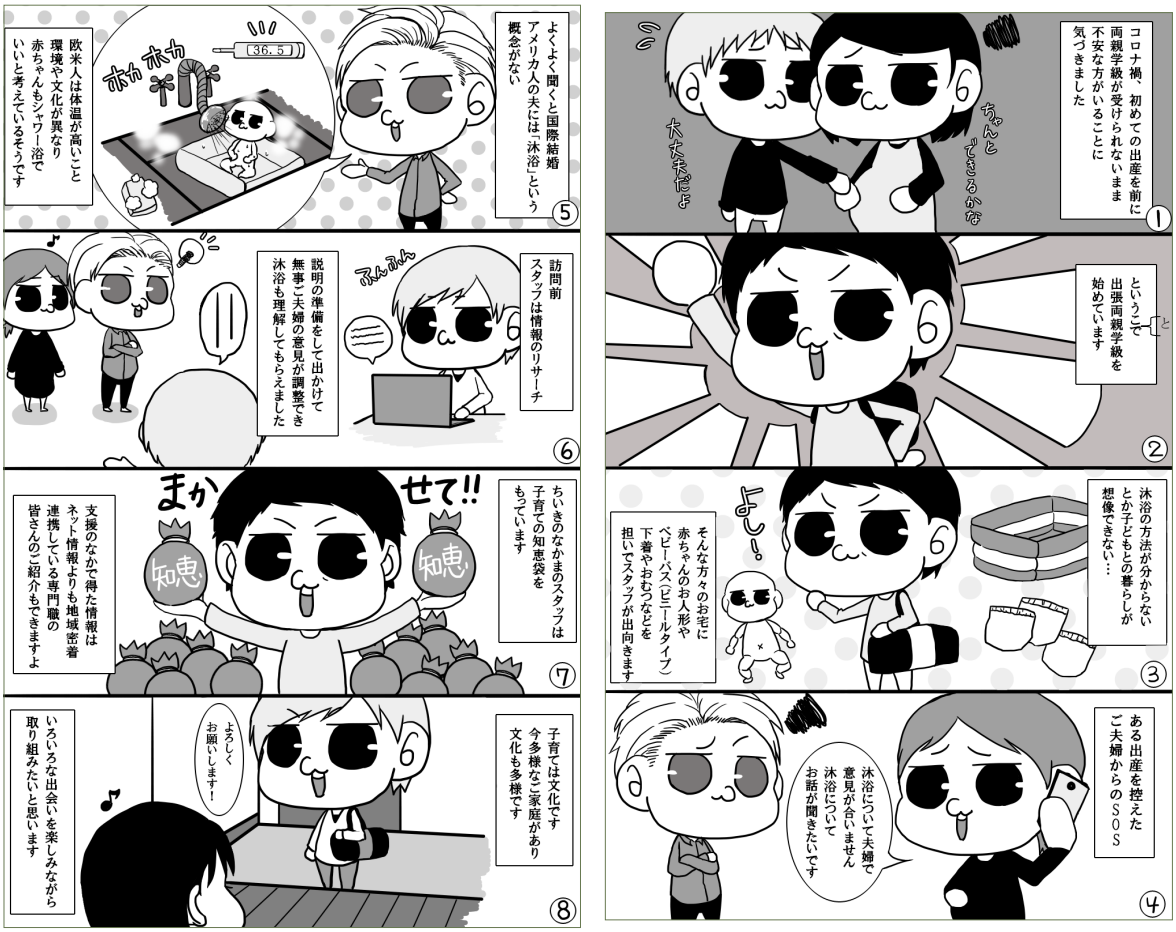
守永理事長は「ファミリーサポートセンターは市民が善意で子育ての『隙間』を埋める事業。その隙間が増えている」と話し、子育て家庭を支える身近な存在の欠如を強調する。「提供会員は使命感と責任感を持って取り組んでいる。その思いや考えを受け止め、支えたい」。

いらすとでみるちいきのなかま「〇〇のこ～んなかんじ」

ちいきのなかまの周りで起こる出来事をイラストで紹介☆

出張両親学級ってこ～んなかんじ

by 蓮すいか

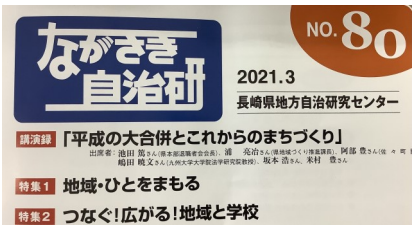


アウトリーチの両親学級…取り組みを開始して間がないのですが、貴重な実践だと思います。子育て支援現場では常識として「多様性対応」です。「普通」など存在しないことが当たり前。コロナ禍だったから始めた活動ですが、グループで学ぶことの傍ら、個別相談が必要な方もきっといるのだと思います。地道に対応し、ご報告をしていきたいと思います。

「長崎県地方自治研究センター」広報誌より取材・掲載！

内容をご紹介します。（取材対応は守永です。）

活動開始のきっかけは



大学で出会った夫と結婚し、故郷を離れました。そして第一子の子育てはアパートの一室でしら。夫の帰りは毎日遅く孤立した子育てでした。気が付くとふと涙が出くる…子どもを可愛いと思えない事の情けなさを体験しました。紆余曲折の後、仲間と出会い育児サークルを設立しました。そこで確認できたのは「つらいのは私だけじゃない」ということ、時代はまさに少子対策の黎明期でもありました。仲間たちと行政に必要性を訴えた「子育て広場」や「ファミリー・サポート・センター事業」が実現していきました。そんな子育て支援事業第1世代の私たち。今、第2世代が子育ての問題に取り組み始めています。

ファミリー・サポート・センター事業」「育児等支援サービス」を受けて

「困り感に共感して寄り添う支援」このことが子育ての負担を軽減するのではないか。「助けてあげる」ではなく当事者目線で「寄り添う」支援を続けてきました。当初から「保育の隙間を埋める事業」と言われたファミリー・サポート・センター事業、必要だとは思っていましたが、まさかこれほど需要が大きくなるとは思いませんでした。

この事業は、佐世保市が県内でいち早く取り組み、設置後20年になります。現在年間2000件後利用があります。直近2年間の活動時間は年間概算ですが3500時間、去年は4500時間となりました。有償ボランティアのファミサポが動いて見えた「保育の隙間」です。この状況をこのままにしていいのでしょうか。本来はこの隙間についての検証が必要なのだと思います。公ができないこと、抜け落ちたところを民間で担い続けることのメリット・デメリットを確認し、それぞれの立場や役割を理解し、子どもを中心にした地域や暮らしをデザインする必要があると思います。私たちの取り組みは、アンケートやヒヤリング、時には言葉にならない苦しみに寄り添う地道なことの積み重ね、実はその中に政策に繋げてほしいことがあります。産前・産後ケアの家事サポートもその一つです。勉強会を経て事業開始した頃は多くの需要は想定できませんでしたが、今、コロナ禍の中でアウトリーチの支援が重要視されるようになりました。佐世保市の育児等支援サービスも受託し、ご利用いただいています。培ってきた子育て支援のノウハウと人材が事業を支えてくれています。

地域には潜在的な女性の力があります

「ファミリー・サポート・センター事業」「育児等支援サービス事業」は、一市民が担っていますが、この事業に関わりながら、子どもたちにエネルギーや力をもらうことで、生きがいとやりがいを見いだし、力を発揮していく人が多くいます。その意味で、支援はケア労働でありながら、単なる「労働」とは違うような気がしています。
社会の中で「風」をつくってきた人たち、地域に力ある人はたくさんいると思っています。人を大事にする働き方、安心して働く環境が出来たら、もっともっとあたたかい社会になっていくのではないでしょうか。
日本では保育はじめ児童福祉はかけがいのない大切なものながら、社会的な位置づけが軽んじられてきました。近年、子育て支援事業が展開されてきたことで児童福祉は多様性と厚みが増してきました。今後、保育と地域の子育て支援関係者が、連携、協働することで、価値を高め、潜在的な地域の人の力がより発揮される環境になればと思います。

共同体の子育てをどう創っていくか

かつて日本にあった共同体での子育て、地域や近所の知恵と手助けを受け子育てする姿はなくなってしまいました。誰にも相談できず、手助けもないままに孤立してしまう子育て家庭が多くあります。共同体の子育てを知っている最後の世代として、私たちは共同体に替わるコミュニティ的な仕組みづくりのお手伝いができたらと思います。
その新しいコミュニティのひとつがファミリー・サポート・センター事業ではないかと思っています。日本社会が大きく移り変わっていく中で、遺すべき大切なものを次の世代へと繋げていくことは、人と人が関わって伝達しながら出来ていくことのように思います。
子育て支援者が赤ちゃんをあやす様子を見て「赤ちゃんには、こんなふうに話しかけるものなんですね」とつぶやいた若いお母さんがいます。子育て文化の伝承は、身構えて取り組むことではなくて、こんな小さなことを積み重ねていくことなのだと思います。

労働組合とボランティアって微妙な関係だと思います。人員削減目的に福祉現場でボランティア導入されて、結果、福祉労働者の賃金が抑制されることには反対です。しかし、そもそも課題解決のために先駆的にボランティアが支援に取り組み、結果制度化して公的支援になった…福祉制度の原点はボランティアです。そこを大事にできたら、協働の道筋が見えるのかもしれません。

※自治研究センターとは？
1957年自治労から誕生した組織。公共サービスに携わる労働組合の自治労が組合員の権利を守るためだけでなく、地域の問題を市民と共に解決していくことを目指して設立し各地方で活動している。

●これからのイベントや講座の予定●

イベント名	日時	会場	内容
ぽちぽちヨガ教室	3月29日 4月12・26日 （月）	ボランティア センター別館	定期開催 参加費￥500　会員外￥800
おもちゃ整理の日	4月20日（火） 10:00頃から	ファミサポ事務所	参加費無料

● 感謝録　2021年1月～2月 ●

皆様のご支援・ご協力に感謝申し上げます。ご寄付は産後うつや虐待防止のための産前産後家事サポートおよび相談事業、出張両親学級事業に活用させていただきます。

（※敬称は略させていただきます）
品川知通子・大賀幸子・槌田禎子・相川加津美・徳田愛子・吉武祥子・花城暢一　川原ゆかり・(医)TOG築山尚史・石田舞子・池田左有里・松田容子・柿田多佳子・三宅正吾・岩永厚子・山崎　翠・守永　恵・匿名

編集後記

2019年の桜。2020年は花見どころか写真を撮らないままで記録なしです。それどころではない心境だったのでしょう。花園町のファミサポ事務所の周辺は桜の開花とともに一年で一番美しい季節を迎えます。今年もお花見という気分ではないかもしれませんが、どうかお立ち寄りください。来年度にはこの周辺で開発が進む予定です。段階的に変わりゆく景色を楽しむのもまたいいのかなと思います

NPO法人ちいきのなかま

入会・会員（正・賛助）会員継続のご案内
正会員：総会議決権あり　入会金¥1,000　年会費　　￥6,000
賛助会員：総会議決権なし　年会費￥3,000
主な特典：各種事業会員特別料金にてご優待
連絡先　NPO法人ちいきのなかま

〒857 0022長崎県佐世保市山手町9-19
携帯　090-9498-3608
E-mail:chiikinonakama@basil.ocn.ne.jp
HP:http://chiikinonakama.boo.jp/